



御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？

— 出会おう、語ろう、今ここで！ —

北
私

向
公

十七茶憲法
釋真了

宗教は心の持ちようか？

「心理から真理へ」という講題にしました。私は仏法聴聞の要をこの言葉から教えられています。聞法とは心の持ちようの問題でなく、すでに運ばれている道理の発見、身の事実への目覚めを賜り続けることと受けとめています。

「宗教はあっても、なくても、いいものだ」と私はずっと思っていました。宗教は人間にとって「プラスα」に過ぎないと。悩み深い人を癒やし、不安を消し去るのは結構だが、元気に会社勤めしている私には一切不要。寺も継がないし、宗教は心の支えにすぎないと決めつけていました。

父が急逝し寺を継いだ後、二〇一一年の東日本大震災の直後にかつての取引先と飲んだ折に、「百々海さん、こんなに不安なことが続くと、宗教でもないよ、やってられないよね」と言われたのです。彼の発言は、私のかつての宗教観に重なり、ギクツとしました。信仰は、一般に「不安解消策」なのでしょう。聞法しながらも、実はその感覚が拭えずにいるのかもしれない

ん。その点をお互いに確かめたく思っています。

キサゴータミー

古くから語り継がれてきた逸話に「キサゴータミーの物語」があります。キサゴータミーは幼い子どもを亡くされ、深い悲しみの中でその亡骸を抱えて、「どうかこの子を生き返らせて下さい」と方々尋ね歩きます。が、当然ながら生き返らせる術はない。そこで訪ねたのがお釈

心理から真理へ

百々海真先生

(了善寺住職)

2019年5月11日

す。この逸話は、仏教の救いは、心境の変化ではなく、道理への目覚めにある、と教えてくれています。思いが破られ、思い以前の事実立ち帰る目覚めです。過酷な逆縁が真理に目覚める縁に転じたのです。

成つとることを聞く

北陸のお同行から、「百々海さん、成つとることを聞くんやぞ」とお聞きしたことがありまして。何を云わんとするのか、私

には長らくわからなかった言葉です。実は仏法を聞いて覚えて何かになるのではなく、すでに運ばれている法に目覚める一瞬を賜る。それまで目に入っていなかったことが、見える。聞こえる。「ああ、そうだったか」と、本来の世界に立ち帰る。古来「言い当てられる」とか「お照らしにあずかる」と言われていることと重なります。

谷田暁峯という先生がおられ

ました。若い頃は不良青年だったそう、家出を繰り返して、親に勧められて、若き日に三年半ほど暁峯先生亡き後の明達寺にご縁を結ばれた方です。縁あつて寺に入り、また縁あつて寺の生活からも逃げ出され、「わしや、家出だけでなく、寺出ました」と言われていましたが、会社員時代から自宅を聞法道場とされ、退職後は故郷の石川県に新築した自宅を「広大舎」という道場に生生涯、聞き抜かれた方です。十年余り前、その広大舎で私が法話を終えた折のこと、補聴器をつけたおじいさんが質問して下さいました。「林暁宇先生から、とにかく仏さまの前に身を置きなさい。わかる、わからんはどちらでもいいから、仏さまの前に座りなさい」と言われ、そのようにしてきました。しかし仏法は毛孔から入ると聞いていますが、入った気がしません。これでいいのでしょうか」と。私は「信心は毛孔からと言われているから聞法を続けてください」とお茶を濁した半端な応答しかできませんでした。私の応答では不十分と感じたのでしよう、長田さんというお

同行が手を挙げてこう言われました。「仏法は毛孔から入るとは、聞いてるうちに何かが入ってくることはない」とワシは受けとめております。すでに毛孔から入っているから、聞く気のない私が、今日、ここに、おるんです。だから、この私を法座に運んでいる力は何なのか。ワシはそれを聞きに来とるんですと。

「毛孔から入った」と言おうが「まだ入ってない」と言おうが、自分で自分を覗く限り、所詮は私の分別です。が長田さんの仰せは全く違いました。「信心毛孔」という耳慣れた言葉一つでも、立脚地によって、意味がまったく変わると鮮烈に教えられた出来事でした。

「我」が破られる
この度刊行した林暁宇先生の書簡集に「どうにもならんというものが人間には大事なのです。それだけが「我」を破っていくのです」という言葉が載っています。「どうにもならんもの」が大事「なんて、人間の物差しに立てばやせ我慢としか聞こえませんが。ですからこれは林先生の前に聞こえた言葉であり、ご自

身もきつとこの一言に育てられたのです。「我」が破られるとは、私たちのものの見方、モノサシが翻される一瞬でしょう。

「一五〇歳」

一月三日付日経新聞の一面にこんな記事が載っていました。
「衰えない肉体」、「老いの抑制、臓器の交換、そして脳と機械の融合が進めば、二〇五〇年には不老不死に近づく」。記事には、「若手研究者約三百人に人間の寿命は何歳まで延びるか」と尋ねたところ、一五〇歳が最も多かった」とありました。不老長寿は人間の見果てぬ夢。ですから夢の実現なのに「一五〇歳」と聞くと苦笑される方が多いのです。記事には、一五〇歳時代が到来したら、「最多の死因は自殺」になるだろうと書かれていました。

問われる生

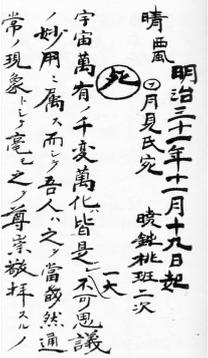
夢が実現しても喜べない。仏法が教える迷いの境界、六道には「天」を含みます。理想実現の「天」を「地獄」と同じ流転と見る眼が仏法でしょう。天は人間の理想郷。浄土は本願の国土。全く異質なんです。思い通りにならないから苦し

いのはわかります。が思い通りになっても空しいというのが現代の課題ではないでしょうか。会社員時代の上司と飲んだ時、「百々海君、きょういく問題って知ってる？」と訊かれました。リタイアして羽を伸ばせるはずが、「きょう（今日）いく（行く）」所がない。自分を持って余す、退屈に直面する。思い通りになっても私に満足無し。ではどうなりたいのか。何故か。この問いこそ仏さまの智慧に訊きたいことです。

「暁鈍桃班二次」

清沢満之先生は明治三十六年六月六日にご西帰されますが、その五年ほど前、明治三十一年八月十五日から『臘扇記』という日記を記されています。結核は進行、宗門改革は頓挫、寺内では歓迎されない厳しい境遇にあり、「役に立たない存在」を意味する「臘扇（十二月真冬の扇子）」というご自身の号を日記名とされたのです。後にこの『臘扇記』を基に多田鼎師が成文されたのが「絶対他力の大道」です。ですが日記ですから天候、手紙の受発信記録や体調も記されています。

二冊目の冒頭、十一月十九日の欄には「晴。西風。フ（封書）月見氏宛。暁鈍桃班二次」と記されています。「暁鈍桃班二次」というのは、夜明け前に（暁鈍いピンク色の血を（鈍桃班）2回（二次）吐いた、という）病状の記録です。



暁鳥先生ご門下の岩瀬暁燈

先生が、愛知県碧南に暮らす同行から請われて、同行宅の玄関の屏風に揮毫されたのがこの「暁鈍桃班二次」の一句でした。単なる病状のメモに過ぎません。が岩瀬先生にとつての仏法は実にこの一句だった。身は思いを超えて運ばれている。自力無功という存在（身）の厳粛な事実をこの一句に聞きあてられたのでしよう。ある時、そのお宅に熊本の西村見暁先生をお招きされた折、先生はその一句を見るなり、玄閑に土下座して号泣されたと聞きました。聞法の何たるかを知らされます。

一句に出遇う

私たちは親鸞聖人にどこで出遇うのか。例えば『正信偈』のこの一句だ、私にとつては『御文』のこの一言だ、この仰せだ、と。漫然とではなく、「ただいまの私においては、この一句に尽きる」と言い得る言葉との出遇い。真理、分別以前の世界からの呼び声として聞こえる。聞法とは、最も具体的には一言との出遇いであり、聞こえる時の到来ではないでしょうか。

聞き書き担当者・感想

今回、逸話や先生ご自身が聞法会で習得された体験談を交えた法話で、親しみが持てました。聞き書きを担当し、よく聴聞できたからこそですが…。
これからも聞法会にご縁をいただき、「私にとつてのこの一言、この一句」なるものを頂けますことを願っております。
(渡辺久仁子)

第17回（7月13日）

「生活の中で出遇う親鸞さまの教え」
牧野桂一先生
(大分子ども発達支援研究所長)